[解説]「裏切りをめぐって:由良君美を < 伝説 > としないために」 四方田犬彦著『先生とわたし』 新潮文庫 306-318頁 2010年7月1日

		第 5 章		第 4 章	第 3 章	第 2 章	第 1 章		目次
解説稲賀繁美	エピローグ	ウェルギリウス	問奏曲	ヨブ	出自と残滓	ファウスト	メフィストフェレス	プロローグ	65
305	299	265	235	173	119	55	15	7	

先生とわたし

よ-30-2

平成二十二年 七 月

__

B

発

行

新潮文庫

発 行 所 東郵

発 著 ください。送料小社負担にてお取替えいたします。乱丁・落丁本は、ど面倒ですが小社読者係宛ど送付 行 者 者 電話編集部(〇三)三二六六―五一一一 価格はカバーに表示してあります。 http://www.shinchosha.co.jp 京 便 都 番 会株 社式 佐 四北 新号 方も 新 藤 田た 潮 隆 犬ぬ 社 信 彦と 印刷·大日本印刷株式会社 製本·憲専堂製本株式会社 © Inuhiko Yomota 2007 Printed in Japan

ISBN978-4-10-134372-3 CO123

述の一部について、 本作品は 『新潮』 由良氏の御遺族から事実誤認などの御指摘を頂 二〇〇七年三月号に掲載された。その後、 その内容および記 V

ユ またあまりに多岐 に快く応じてくださった多くの方々に感謝を申しあげたい にわたるため、 御名前を挙げると とは遠慮した 0 V が、

裏切りをめぐって 由良君美を〈伝説〉としないため K

賀

のヤツね、と満足げに微笑み、参考にするといいね。とのご託宣が返ってき事も無げに笑顔でそう言い放つ。『至高体験』のことを切り出すと、ああ、 先生は、まだ翻訳など碌に経験したこともない新参者の密かな当惑を平然と無視してでなら一夏もあれば訳せるだろう。原稿の山が机に50センチくらいの高さにはなるけどね。 稿が、米国で一冊にまとめられた。ついては是非ともこれを日本語にしたい。 輩格が、颯爽と航空母艦から発艦してゆく様を見せつけられた思いがした。2年後、修 田剛己共訳として駒場の生協書籍部の新刊の棚に並んだ。4歳ほど年長の、大学院の先のことだったかと記憶する。コリン・ウィルソンの著作が『至高体験』由良君美・四方のことだったかと記憶する。コリン・ウィルソンの著作が『至高体験』由良君美・四方 い込んだ。エルンスト・カッシーラーが亡命先のコロンビア大学で晩年に遺した英文原 士論文を書き上げてみると、指導教員でもなかった由良君美先生からこふいに打診が舞 それは、四方田剛己という名前の院生が韓国へ旅立ったと風の噂 で耳に ヨモタ君と なに、君

その後

0

30年で百冊を越す著作を巷間に問うことになるヨモタを見いだした由良君美

いねことのご託宣が返ってきた。

ばならないのか、その間の事情など、 「表情機能」が提示され、河本氏とのあいだに一挙に信頼が成立したその瞬間を。 者にと巻き込んだ河本英夫には、とんだ迷惑をかけた。とはいえ今も鮮明に思い出す とも当時の私には、なぜ英語担当教師である由良君美がカッシーラーの翻訳に携わら Ausdruckungsfunktion をどう訳しましょう? との問いに、由良師より間髪をおか まだ皆目見当もつかなかった。

の訳稿の山のほうはといえば、遂に日の目を見ずに終った。気の弱い当方が、是非共

まことに端倪すべからざる名伯楽だった。だがカッシーラー『象徴・神話・文化

先 生 かしそんな場面でも狼狽などは露ほども見せず、講演はそのままで平然として続行され席で映したど自慢のスライドが、全てピンボケかつ裏返しとなる大失態が出来した。「敗するといった見込み違いは、もとより折り込み済だったのだろう。一度、公開講演で さないような小心は、由良師の無頼への憧れが許さなかった。とんだ外れを抜擢しては、劣等生でなければ知らない別の一面も潜んでいるからだ。だが安全牌にしか手をはは、劣等生でなければ知らない別の一面も潜んでいるからだ。 良君美たるものの矜恃だった。でも先生、先生はその裏でど自分にずいぶんと無理を強 た。およそ公の場では、凜たる気概を漂わせつつ、聊かも動じない胆力を誇るのが、中 ておられたのですね。「50センチの原稿の山」といった文学的誇張の陰で 冒頭から内輪話に及んだのは、ほかでもない。本書に描かれた由良君美の行状 似たような事例が、まだ無数ともいってよいほど控えているだろう。 そしてそと (もちろん、

れはワープロ以前の当時の二百字書き原稿用紙でのととだ)。

れる。 な着こなしと、悠揚迫らぬ口調。メモひとつもたぬまま、その口からは、英米文学のみ 君美は一世を風靡したカリスマ教師だった。穏やかな風貌と甘いマスク、スーツの見事の世紀の70年代から80年代の末に至るまで、東京大学駒場キャンパスにあって、由良 かと思われる学識が、およそ言い間違いなどとは無縁な完璧さで、理路整然と紡ぎださ ならず、哲学、神話学、文化人類学、美術さらには映画にいたる領域に渉って、 た体験を共有する学生は、 も根気よく付き合ったすえ、脈があると見た学生は気軽に研究室に呼び寄せ、そのあげ め尽くしてゆく。少人数のゼミともなれば、悠然とパイプを燻らせつつ、下手な発表に しかもそれを悉く読破していた、との驚嘆すべき人物。年端もゆかぬ学生には、行くと いう恐ろしい言葉とともに。一週間で読み上げて感想を述べるという宿題の恐怖に慄いくには、分厚い洋書を気安く貸してくれる。「来週までに返してくれればよいから」と コールリッジやブレイクの詩句が、丹精かつ細密な文字でもって、黒板をびっしりと埋 いう恐ろしい言葉とともに。 知られざる名著から、昨日届いたばかりの洋書新刊までの書誌情報が、あるいは いったい何人くらいに上るのだろうか。膨大な書物に囲まれ

とろ不可ならざるはなし、

と映じたとの偉大なる教師は、

しかし己が内面に、

深い孤独

308

本書『先生とわたし』だった。 師弟関係の水面下に潜む黙約

得て蘇り、ジグソーパズルのように、埋められてゆき、謎のように記憶の庇 しく立ち上がり、彼の生きた時代が新しい相貌を帯びて蘇生する。 なかから、いままで漠然と感じてはいたが摑みきれずにいたひとりの人物の姿が、 異様な戦慄に捕らわれた。自分の人生にぽっかりと残されていた8年代の空白が次々と かれる日のくることは予測できた。だがサン・ミッシェルのカフェで頁を開くや、 田犬彦がそれまでに執筆したエッセイのことかしとから、やがて長編の由良君美論が書 (1990年11月刊)といった、一読誰の追悼か判然としない謎めいた文章も含め、本書初出の『新潮』2007年3月号は、旅先のパリで偶々落手した。「悲嘆の 謎のように記憶の底に淀んでいた幾つもの断片が、くっきりと輪郭を 全体の構図に収まってゆく。そのモンタージュの 四方

ワシントンD.C.より早々に礼状を認めた。70年代後半から、著者に数年の遅れを取替えのない書物であるととは瞬時に分かった。よくぞことまで、という賛嘆を込めて、 って、偶々近傍で「由良君美」を体験した一読者の、それが正直な私的実感だった。 海外逃亡ゆえ1980年代の日本の国内事情に不案内な解説者にとって、 その四方田犬彦氏から、 『先生とわたし』文庫版への解説依頼が舞い込んだ。「以前お

本書は弟子に裏切られた、との妄念に苛まれた師を主人公とする。師は弟子に裏切ら過分なる「買い被り」の才能を、見事なまでに相伝しているではないか。そんな粗忽者を相手に、「先生とわたし」即ち、由良君美と四方田犬彦とは、いかにもら、その公刊に失敗するという体験だけは、みどとに一度、由良先生の轍を踏んでいる。 良先生の弟子」などと公言できる器ではない。その癖、学生に共訳の仕事を依頼しなが 汲むととには失敗し、その些末な短所に限って継承するものだ。解説者はもとより「由く 手紙を戴いたときから、 にまんまと大失策を演じた自分の姿だった。得てして弟子というものは、師匠の美質を て。だが指名された刹那、脳裏に去来したのは、はや30年以上前、由良師からのど指名 のは、他の人であってはならないと考えておりました」。そんな殺し文句まで添えられ 由良さんを理解した人で、あの本に引導をわたしていただける

それと同様に依頼者の期待もまた、裏切られるのが世の常だろう。本書の隠された 「裏切り」。 その様相を三つに分けて、 以下簡潔に論じておきたい。

*

9 その背後には、周到な調査と、神経を行き渡らせた綿密な構成とが控えている。 いては、 本書には、読み始めたが最期、 自身も由良君美との関係において、 もはや巻を閉じること能わぬ筆力が横溢。 因縁浅からぬどころではない、 てい 抜き差し ・るが、 とれに

309

とわたし

時代錯誤の短絡的解釈も、

一箇所とし

い。少なくとも解説者が知る限りの件に関しては、後の状況を遡って当て嵌めるようない。少なくとも解説者が知る限りの件に関しては、後の状況を遡って当て嵌めるような な事実誤認を難詰する筋もあったようだが、そんなものは詰まらぬ言い掛かりに過ぎま

無根拠に一方的な断言を下す、

当てずっぽうの評論家的憶測

先 生

し、曾我蕭白の絵画が賞賛され、横光利一の

がそとにはなぜふいに北畠親房が現れ、ジョン・スチュワート・ミル親子の話に飛び火煙業のあと研究室に招かれると始まった、由良君美の自称「花咲爺」の文学談義。だ

るを得ぬ脈絡が、縦横に浮かび上がる。なかでも圧巻が、由良哲次の姿だろう。

て立ち混じってはいない。逆に思わず「そうだったのか」と慄然たらざ

どく奇妙な印象」の謎を解く鍵は、

通称由良ゼミ経験者ならば、誰しも一度は抱いたに相違ない、唐突との感覚。

『日輪』が話題となったのか。70年代末の

ドイツでカッシーラーに師事した、

君美の父、

由良

西田幾

との「ひ

したのに続き、

の話を聞かされた頃、

いたのだ。

とうして忘却の海の底から長年の謎が次々と浮揚され、

遺産相続と贈与税問題で税務署との裁判沙汰に、多大なる労力を傾けて

俄然星座をなして輝

由良君美は、父君の晩年にその美術収集を奈良県立美術館に寄贈

から鱗が落ちた。

なぜ息子が新井白石の幼名を授かったのか

\$°

当方などがミル親子

310 ならぬ暗闘を経験した高山宏が「伝説の知性に迫る取材と筆力」とのリードで日経新聞

に書評している(2007年8月5日朝刊)。

他の書評には、目撃者でもない

た異才。 多郎のドイツ語訳を企て、三木清とも親交のあった、君美の厳父は、南朝正閏の哲次の生涯のらちに隠されていた。ディルタイの歴史哲学をハンブルクで究め、 琉球語学者であると同時に、江戸絵画の奇想に耽溺し、浮世絵類考をも遺稿に遺し 哲次という大天狗が控えていた、 その軌跡を再発掘すると、 ゆくりなくも見えている。君美という天狗の背後に という事実が。 著者のとの立証には、 文字通り目

窓切りをめぐって ―― 由良君美を〈伝説〉としないために 実相に迫り得たのは、未亡人が筆者に寄せた信頼の賜である。 て しかし何を根拠に?(それが解説者には久しく謎だった。師が家族にも見せずに秘匿し、由良君美は密かに詩作に打ち込んでいた筈だ。著者は何度となくそう漏らしてきた。き始める。それも光彩の裏に深い陰翳を宿しつつ。 け口をドイツ・ いた詩稿を、 師の秘密を公開する「裏切り」行為とも表裏一体たらざるを得ない。 師の没後、筆者は未亡人から借覧する機会を得ていた。父との葛藤のは ロマン派調の詩へと託した、君美思春期の魂の秘かな「裏切り」。 V か だがそれはまた、 んし

学が疎かにし 筋にあたる人物を顕揚すれば、 第二に著者がことで挑んだのは、自分の生きた体験を、 にしてきたとの厄介な閾を、 、という困難な課題への、 虎の威を借る狐といった夜郎自大に傾きがちだ。 自己瞞着なく跨ぎ越す かは、 容易ではない て「歴史」

官製の歴史

0

師匠

へと組み

その

311

己が軌跡を歴史仕立てで審美化すれば、

自己顕示欲の異常肥大という嫌疑を受けかねま

番煎じも懸念される。

史記述を改竄・操作する、という陥穽も待ち受けている。歴史という不可逆な過程には番煎じも懸念される。生き残った者が、時代の証言者面をして、都合よく手前勝手に歴

さらにそとには、今との解説者が回避すべき愚、亜流の追随者による阿諛追従さらにそとには、今との解説者が回避すべき愚、亜流の追随者による阿諛追従

の 二

とわ たし 性格を濃く宿した8年代の年代記でもある。著者自らも、 の事情を自己分析している。それによれば、内面に籠った繭の時代たる 国への脱出に至るまでの精神的沈潜を描く『歳月の鉛』のいわば続編であり、 した高校生活を描く『ハイスクール1968』、さらに大学での日々、 付きものの、とらした「裏切り」への誘惑をいかにして退けるのか。 筆者の著作を多少とも知る読者には自明のことだが、本書は、大学紛争の 近著『女神の移譲』でと 1979年の韓 『歳月の鉛』 余波を体験 自伝的な の間

先 生 状態の微睡みを、無理矢理すでに定まった「型」に嵌めるという、原理的な無理を強い そが、人生にとって最も枢要なる季節である。しかしそれを、回顧の視線による合理化動の公刊開始とともに社会的な自己が確立される。だがそれ以前の助走期間・思春期と ずには成就しえないからである。 を被らない姿で描出することは、至難の技となる。なぜならそれは、形をなさない融溶 れ落ちたのが『先生とわたし』だったのだという。 備する段階で、関係者との面談を重ねるうちに、いわば皮肉にも「副産物」として生ま (題名は錬金術に由来し、卑金属がゆっくりと変成する徴睡みの期間の謂らしい)を準 いわゆる「歴史」とは、 およそ物書きならば誰しも、著作活 ひたすらとの乱暴な事後検閲

直中にとそ、生成途上の歴史の真実が宿っているのではなかろうか。(葉なり)の取り違いを冒しがちなものだ。だが、一枚岩へと変容を遂げる地殻変動の「裏切り」の取り違いを冒しがちなものだ。だが、一枚岩へと変容を遂げる地殻変動の によって都合良く整地された表層に拘泥 し、それを後世に伝えるべき情報と誤認する

悪魔的なまでの磁力を発揮した師匠との相剋に、納得ゆく決算書を与えること――それ人史のなかで澱のように沈殿した禁忌だったはずだ。メフィストフェレスを彷彿とさせ、 費やして「悪魔祓い」の儀式を己に課した。由良君美との出会いと訣別とは、著者の個著者自ら封印を施していた「鉛」の修業時代を解凍する傍ら、四方田犬彦はひと夏を 己の再統合を実現する契機であることは、よく知られている。だがそれはともすれば、 死を悼む喪の作業 travail de deuilが、環境との和解や歴史軸への個の定位を促し、 を営むタイミングは、けっして思らがままに到来するものではない。たしかに近親者の が、人生の厄払いだったととは間違いない。だが人の一生で、哀悼的想起 Eingedenken 自

って緻密に再構成し、 そとにあらためて時代の匂いを沸き立たせる工夫だろう。 で、

故人の年代記を整理し、客観化された情報を社会に還元することで清算を終えるか

`

晩年になっての自伝的回想に、若き日の郷愁を託すといった退行に逃避する場

著者は張承志の

『敬重与惜別』を論じた別の文章

(『女神の移譲』

所収)

近年

Ó

314 による 「ある時代の神話を粗雑に脱神話化する行為」を批判

膨大なる物量作戦によって、 文献整理がなされる時代となった

式整地の横暴を裏切るしたたかな逸脱にこそ、歴史の実相が測定されうる。それが、

ブル

ドーザ

ミニマ・モラリアだろう。解説者はそとに、著者がなかば無意識のまま、

いわば哲次を反面教師として

-汲んだ、

歴史哲学の実存的

由良君美

・アドルノの言葉を借りるならば、由良君美「と」その時代を語る四方田犬彦

今や学術的体裁の下に、

だが脱神話化された平盤な地形図を前にして感じざるを得ない違和感や、

先 生 ے わたし

第三に、

それ

ではこの歴史哲学は、

倫理を見る。

でその父哲次から

オドール

-由良君美を〈伝説〉としないために

ではなく、

の本質』

(講談社現代新書)

照明を与えている。

ひとつ間違えば、

四方田犬彦の実録風私小説、

との師弟=関係論が人類史的な普

師匠にその才能を嫉

曲」に至って、やおら、ほかならぬその山折著が召喚されているではないか。

を思いだしながら、

本書を読み進めていた。すると「間奏

それ

だけ

『師の教

え』も。ともに2003年に刊行されたとれらふたつの著作が、本書に側面から卓抜な

由良君美が肝胆あい照らす間柄であったジョージ・スタイナーの

限りの最適任者が、

時間の熟するのを待って、

て結実させている。

余人をもっ

てしては描き得ぬ師弟関係の深淵を、

およそ考えられる

の地点で、

な人間関係を一代にして築いた由良君美。

秘事伝授の、最奥の実相を抉り出す。

党事伝授の、最奥の実相を抉り出す。学閥とは無縁に、梁山泊よろしき広範もはや今日の教育環境からは永遠に失われてしまったようにも見える、学

その衣鉢を継げばとそ、出す。学閥とは無縁に、

の仇でどざる」と福澤諭吉をもじってみせる。

師からの遺産のしかるべき継承

のありかたを思索し、

それを入魂の紙碑

そして過去への懐旧的感傷とは無縁

弟子は「学閥政治は

ろか本書は、

伝えゆくべき、貴重なる歳月の記録、

かなる関わりをもつのだろらか。

もはや明らかなように、

本書は、

誰か

が書い

て後世に

ととに描かれようとした師弟関係という主題とい

などという次元に留まるものではない。それどこ

致が、ととにはある。解説者は山折哲雄の

『教えるとと、

裏切られるとと-

師弟関係 てゆく筆

ひとつの原型にまで高めて描い

315

晩決裂が訪れるだろう。

を弟子がもてば、その弟子はもはや師に従順な弟子とはいえず、

逆に従順な弟子はたしかに忠実に学統を引き継ぐだろうが

競合する両者には、

師に匹敵する卓越さ

の年齢に達して初めて、それと察することを許される盲点をなす。

はそりした憂情や弱みを弟子に漏らすことは許されない。それは弟子がまた自らも師匠

留学の機を逃した桎梏から脱却できない、傷つきやすい戦中派。だが師中に雄飛し、縦横に活躍する脱・戦後世代と、学識とは裏腹に英会話に

学識とは裏腹に英会話に不

韓国さらに欧米

誇りとは裏腹な嫉妬や焦燥あるいは羨望。

如意を託ち、

遍的次元を植え付ける。

優秀な弟子をもった師の、

海外を自由に雄飛し、

妬された一番弟子の自慢話へとも堕しかねぬ結構に、

るととと引き替えにのみ許される、

背信の代償行為なのだろうか。

生 ۲ ゎ たし 316 るのは師の亡霊、夢の残骸に過ぎない。哀悼とは、畏怖すべき対象がその審級を喪失す良君美が、その早すぎる最晩年に企てつつ、未完成に終わった夢だった。弟子が目にす だから、師への忠実さを毫も疑わない弟子をちの確信とそが、 挿絵を付けようとして、惜しくも途上で中絶したが、それを詳解する目論見もまた、 リスト教世界への参入は許されないからである。ウィリアム・ブレイクはとの煉獄篇に の覚醒を前にして師ウェルギリウスは背後に立ち去るほかない。異教徒たる師には、 との覚悟を得る。ダンテの『神曲』煉獄篇第23歌が、その原型を提供する。弟子ダンテ「師は過ちやすき者」。スタイナーのとの命題を読み替えて、著者は「師とは脆きもの」 らに転んでも、 の忠実さは凡庸さに他ならず、結果としてその学統は師の偉大さを裏切るととになる。 カリスマ性ある師が嫌でも抱え込まざるを得ぬ脆さ、vulnerabilityを見る。 明白な背信行為の証拠となる。そとに著者は、 ひとり由良君美には限ら 師の側からみれば、

美はフランス語に不案内だったのだろうか。大学院の授業でベルクソンの一節を由良氏 が正確に朗唱した音声記憶が当方の耳朶には残っている。つぎに1981年、冒頭に触 れたカッシーラー翻訳の相談のあと、梅雨沛然とするなか、吉祥寺の安酒屋に入った由 最後に本書の理解を補り挿話を三つほど書き添えておきたい。まず、はたして由良君

仲人を依頼した西脇順三郎や、不世出の言語哲学者・井筒俊彦の思い出につづけて、突ときとというできょう。 にまたがます にままが にままが 「お銚子20本」を注文するや、かつて夫人との婚礼の良君美は、空腹も構わずいきなり「お銚子20本」を注文するや、かつて夫人との婚礼の 思いがけない脆さが隠されており、時に過剰なまでの謙遜の陰には、 文中の「柳」が由良氏自身の内面の傷の提喩とは分かりながら、却って見て見ぬ振りのを開いていた。なまじそれを知っていたためか、同年駒揚で助手を拝命した解説者は、 『教養学部報』に「柳下去辞」を掲載した。キャンパス前の京王井の頭線プラットフォ がありありと窺えた。最後に89年、「嵐」も静まり、駒場を去るに際して由良君美は る交渉で、本郷文学部のお歴々とやり合った晩のととだ。そとには、すでに酒乱の兆候 然「由良は阿呆でどざいます」を連珠のように唱え始めた。駒場に表象分科を立ち上げ 「裏切り」の補遺である…… 「裏切り」を冒したととを、今になって思い出す。氏の装ったダンディーぶりの裏には、 っているととに、ふと気づかされる折節もあった。『先生とわたし』 ームから見える柳の大木は、88年の夏の台風のおり、無惨に幹を抉られ、生々しい傷口 鬱屈した激昂が滾 への、

命」を過ぎた頃のことだった。 した、その同じ年齢に達して、 私情を語るべき時ではない。 自らもその年齢に達した四方田犬彦が本書の原稿を執筆 解説者もまたとの一文を草している。希望に溢れ 暗い憂愁が由良師を襲ったのは、齢50

317

318

50代半ばに師匠が囚わ

れた危機、あの常軌を逸した激昂と蹌踉たる精神の彷徨も、他人30年前の学窓に比べ、現下の閉塞状況は耐え難い。それだけに、30年前の学窓に比べ、現下の閉塞状況は耐え難い。それだけに、 他人事とは思われない。

己を顧みると、 ...教師としての過ちはといえば、 由良君美の離れ業に接して、

ば、それが師の手際の幼稚な模倣だったととに気づいて、愕然とする、

先 生

ての、

頑丈さだけは筋金入りの第一研究棟の幻が、

木立に囲まれ鬱蒼とした姿で、

蒼とした姿で、仄かではなく鉄筋三階建

(平成二十二年五月、

国際日本文化研究センター

総合研究大学院大学勤務)

との作品は平成十九年六月新潮社より刊行された。

に佇んでいた。

去っていった。霧の奥には、

今は亡き旧制駒場南寮、

「木造二階」

白の「寒山拾得」よろしく、

ごよろしく、哄笑とともにそう言い放つと、朝霧の駒場の杜の薄明へといかにも古臭い言葉だが、数日前、久々に夢枕に立った由良君美は、蕭

好漢自重せよ。 い。だがその

とわたし

った。

由良君美の薫陶を徳とする曾

ての学生たちは、

世代が違えば互い

に面識も

な

5 K

その繰り返しだ

とれだけは 反省すれ

自

「梁山泊」一同たるからには、

師の轍を踏む「裏切り」だけは許されまい。